



TITLE:

口承史からみた越境経験と交易の変容--中緬泰国境を渡った在タイ雲南系ムスリム移民の展開

AUTHOR(S):

王, 柳蘭

CITATION:

王, 柳蘭. 口承史からみた越境経験と交易の変容--中緬泰国境を渡った在タイ雲南系ムスリム移民の展開. アジア・アフリカ地域研究 2008, 8(1): 22-51

ISSUE DATE:

2008-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/80122>

RIGHT:

口承史からみた越境経験と交易の変容

—中緬泰国境を渡った在タイ雲南系ムスリム移民の展開—

王 柳 蘭 *

Social Changes of Migration and Trans-border Trade across China, Burma and Thailand from the Middle of the 19th Century to the Latter Half of the 20th Century: Oral Histories from Yunnanese Muslim Migrants in Northern Thailand

WANG LiuLan*

Along the border of northern Thailand, there exist Yunnanese Muslim migrants' communities. In China, Yunnanese Muslims are referred to as Hui. Despite the heterogeneity of Yunnanese Muslim society, little attention has been paid to the variation of migratory patterns and the factors which pushed migrants to settle in northern Thailand. This paper will focus on the migratory history of the Yunnanese Muslims from the middle of the nineteenth century to the latter half of the twentieth century based on oral histories gathered through intensive fieldwork, in relation to their transformation of the trans-border trade between Yunnan province and northern Thailand.

Before the middle of the twentieth century, only a small number of Yunnanese Muslims lived in northern Thailand, most of whom were engaged in trans-border trade. They normally went to Thailand in the dry season, carrying hand-woven cottons, felts, silks, medicines, and household goods from Yunnan and returning home with ivory and traditional medicines, such as pilose antlers and bear gall bladders. Enriched by the flourishing trade, the Yunnanese Muslims built two mosques in the city of Chiang Mai in the late nineteenth and early twentieth centuries: Ban Ho mosque and Chang Phuek mosque.

However, in the interviews I found that the Yunnanese Muslims who had settled as traders before the middle of the twentieth century accounted for only small portion of the present population in this area. Rather, most of them settled there after the latter half of the twentieth century. The reasons for migration changed drastically due to the civil turmoil in China, KMT (Kuomintang) aggression and socio-political instability in Burma. These factors also influenced their way of living, especially trade.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2008 年 8 月 11 日受付, 2008 年 9 月 5 日受理

1. は じ め に

タイ北部国境域には中国雲南省出身の回族移住者のコミュニティが存在する。回族とは中国における少数民族のひとつでイスラームを信仰し、おもに漢語を話す民族集団である。¹⁾ 以下、雲南省出身の回族で海外移住した人びとを雲南系ムスリムと呼ぶ。²⁾ 本論では 19 世紀後半から 20 世紀前半までと 20 世紀後半以後における雲南系ムスリムの交易をめぐる移動と越境経験の変容に関わる口承史を掘り起こし、彼らのコミュニティの成立史を微視的に描き出す。

現在、北タイには約 1 万人の雲南系ムスリムが居住していると推定される。³⁾ 彼らは 19 世紀後半から 20 世紀後半にかけて、異なる移動波をへてコミュニティを形成してきた。タイ社会では雲南系ムスリムはホー (Ho)⁴⁾ と他称される。また、移動の中継地であるビルマではパンデー (Panthay) と呼ばれてきた。⁵⁾

これまでタイにおける雲南系ムスリムについては、交易活動に着目した歴史的研究が行なわれてきた。雲南は古来より中国と東南アジア海域を結ぶ内陸交易の中継的位置を占め、そのなかで雲南系ムスリムは、地域間交易の担い手として重要な役割を果たしてきた。雲南系ムスリムを対象とする歴史的研究では、おもに 19 世紀以後植民地列強の東南アジア進出に伴い、欧米の旅行者や宣教師などがこの地域を踏査した資料にもとづいて、雲南・ビルマ・タイ・ラオスといった西南中国から東南アジア大陸部に至る交易ルートで、雲南系ムスリムがさまざまな商品を運搬していたことを明らかにしている。

たとえば、雲南から域外に輸出された商品としては、鉄・銅・鉛などの鉱山資源、地織物や木綿製品がある。他方、域外から雲南に輸入された商品にはビルマ領内にあるバーモー (Bhamo)⁶⁾ 産の綿花やカチン (Kachin) 山地産のルビーなどの鉱石類、シャン (Shan) 州北部

-
- 1) 中国にはイスラームを信仰していても回族ではない民族がいる。すなわち、ウィグル族、カザフ族、キルギス族、タジク族、ウズベク族、タタール族、東郷族、撒拉族、保安族である。本論では中田 [1992] の回族の定義を採用した。中田はさらに詳しく、回族は「中国各地に散居して、イスラム教を信仰している民族で、中国語すなわち漢語を日常語としている。トルコ、イラン、アラブ等の外来民族の子孫を中核としているが、これに漢民族その他の諸民族の血が混入され、歴史的に形成された民族」であると定義している。
 - 2) 中国における回族の範囲は中華民国、中華人民共和国以後の国家による民族政策により変化してきた [中田 1971]。本論では中国における国家によって定義された「民族」と区別するため、雲南系回族ではなく、雲南系ムスリムという表現を用いる。
 - 3) 雲南系ムスリムの人口や分布について統計的な数字は公表されていない。1 万人という数字は、筆者が 1998 年に雲南系ムスリムから得たつぎのような説明にもとづいている。すなわち、北タイには雲南系ムスリムと雲南系漢人を含めて約 8 万人から 10 万人いる。そのうち、雲南系ムスリムは約 1 割から 2 割である。
 - 4) タイ語におけるホーの語源は諸説あり明らかではない。タイ社会ではホーの指し示す民族範囲はいまいで、雲南系ムスリムと雲南系漢人の双方に使われている。筆者はこれまでホーと他称される人たちについて、雲南系漢人についても研究を行ってきた [王 2004, 2008a, 2008b]。
 - 5) ビルマにおける雲南系ムスリム (パンデー) の研究には Forbes [1986, 1988], Lin [1991], Yegar [1966], 吉松 [2003] などがある。
 - 6) 本論で用いる主な地名表記は Nelles Maps シリーズの Myanmar (1:1,500,000) と Southeast Asia (1:4,000,000) にもとづいている。また、図 1 は高橋監修 [1994] の原図をもとに作成した。

産のアヘンや北タイの象牙、鹿茸、虎骨などの森林資源がある。同時にビルマはアヘン輸出の中継地としても機能し、雲南からの商人はビルマのシャン州のアヘンをタイに流通させていた。また、雲南域内では、普洱産の茶、磨黒産の塩や通海産のタバコなどが主要な産品として流通していた [Chiranan 1989; Forbes 1987; Forbes and Henly 1997; Hill 1998 など]。

しかし、それらの歴史的研究が扱ってきた時代は 19 世紀後半からせいぜい 20 世紀初頭までにすぎず、現在北タイに住む雲南系ムスリムの大多数が移住してきた 20 世紀後半における彼らの移動をとりまく歴史的・社会的環境についてはこれまで明らかにされてこなかった。⁷⁾ 20 世紀後半に生じた雲南系ムスリムの移動は、それ以前の交易を主たる要因とした形態とは大きく異なり、中国、ビルマやタイをめぐる国家内・国家間関係に影響を受けていた。現在、北タイに住む雲南系ムスリムがどのようなプロセスをへてタイでコミュニティを形成したのかについて、交易の変容と移動に着目した詳細なデータは提示されてこなかった。

本稿ではまず、19 世紀半ばから 20 世紀前半までの在タイ雲南系ムスリムの越境と交易について記述し、それにあわせて当時、どのようにタイへの定着化が行なわれていたのかその特徴を指摘する。つぎに、20 世紀後半における雲南系ムスリムの越境と交易について、彼らをとるべく歴史的状況の変化に着目しながら、中国からの出国の状況、中国からビルマへの移動とさらにビルマからタイへの移動過程についての概要を述べる。その後、20 世紀後半にタイへ移動してきた人びとの口承史をとりあげ、移動を成り立たせていた諸要因と移動パターンや交易活動について 5 人の事例から具体的に述べる。そのうえで、2 つの時期にわたる雲南系ムスリムの越境と交易活動の経験の諸変化について比較し、考察を行なう。

2. 19 世紀後半から 20 世紀前半までの雲南系ムスリムの越境と交易

2.1 交易活動の環境

19 世紀後半から 20 世紀前半における雲南系ムスリムの移動と定着に共通しているのは、彼らの定着地点がかつての中緬泰国境をつなぐ交易ルートと密接に関係している点である。

雲南と北タイの交易によるつながりの歴史は長く、歴史家のフォーブスは古くは 16 世紀にはすでに中国からの商人がチェンマイに交易のためにやってきたと記述している [Forbes 1987]。また、栗原 [1991] によると、雲南・ビルマルートは漢代以後からベンガル湾につながる交易ルートとして開かれ、後に海上交通の発達により一時的に衰退するが、19 世紀以後、西欧列強イギリス・フランスによるビルマ・インドシナの植民地を契機として、再び中国に至

7) チェンマイ市における雲南系ムスリムのコミュニティ内の諸活動について先駆的研究を行なったのはタイ人のスーテップである。彼は雲南系ムスリムとインド・パキスタン系ムスリムの双方の相互交渉に着目した北タイムスリムコミュニティの概略について紹介している [Suthep 1977]。また、雲南系ムスリムの北タイにおける分布を調査した研究には今永 [Imanaga 1990] がある。



図1 本論で扱う主要な移動地点

る近道として雲南經由の交通路が注目されてきた。とりわけ、雲南系ムスリムのビルマやタイへの進出が顕著になるのは、19 世紀半ば以後とされる [栗原 1991: 140; 馬 1996]。

雲南系ムスリムは、通常、馬やラバを使ってキャラバン隊を構成し、雲南の域内外の移動を繰り返していた。馬やラバを使った交易活動を中国語では「赶馬」という。雲南の域内を移動する際、交易人は、雲南語でティエンツ⁸⁾と呼ばれる宿を利用していった。通常、交易ルートに

8) 漢字不明.

は必ずティエンツがあり、宿泊料を払う。ティエンツには、少ない時で 4~5 人、多い時で 15 人ぐらいが同居する。ティエンツの敷地周りには、馬やラバが食べるための草が用意してある。交易人は、自らが培ってきた交易経験から移動中のどこにティエンツがあるかを事前に把握しており、移動の際には住む場所には全く困ることはない。⁹⁾

また彼らは、同じキャラバン隊で寝食をともにする仲間を「同じ鍋を食べる」(吃一個鍋)と表現する。「鍋」という表現は、交易をしながら各地を移動する雲南系ムスリムにとって、食糧を常備することが不可欠であったこと、そして、実際鍋その他の調理具を携行したことと関連している。キャラバンの隊長は「大鍋頭」と呼ばれた。この名称が示唆するように、キャラバン隊にとって「同じ鍋を食べる」ことは、彼らのキャラバンにおける帰属を示すうえでもしばしば使われた。隊長の部下として働き、馬の世話をしながらキャラバン隊に従事する人たちは、「赶馬人」と呼ばれた。また、キャラバン隊には会計係として働く者もふくまれていた。くわえて、キャラバン隊には料理係も随行していた。このように、キャラバン隊は、さまざまな役割を担った交易者が人的関係を築きながら移動していた [cf. 胡 1999; 黄 1993]。

2.2 タイへの移動の経路とコミュニティの成り立ち

20 世紀前半までにどのような形で、雲南系ムスリムはタイに定着したのであろうか。筆者がフィールドワークによって把握できたのは、チェンマイ (Chiang Mai) 県チェンマイ市、チェンラーイ (Chiang Rai) 県チェンラーイ市、メーホンソーン (Mae Hong Son) 県メーサリアン (Mae Sariang) 市の 3 カ所である。このうち、チェンマイ市とチェンラーイ市には、それぞれモスクが建てられている。以下では具体的な聞き取り調査ができたチェンマイ市とメーサリアン市における雲南系ムスリムの定着の状況について記述する。

2.2.1 チェンマイ市

チェンマイ市には、雲南系ムスリムによって創設されたバーン・ホー (Ban Ho) ・モスクがある。このモスクは、かつて王都であったチェンマイ市の旧市街を囲んだ城壁と、市内を南北に貫流するピン川 (Mae Ping) の間にある。この地区は、今ではナイト・バザールと呼ばれ、夜になると土産物の露店がならび、国内外からの観光客でにぎわう町である。20 世紀前半までのバーン・ホー・モスクの形成過程については、別稿で述べたので [王 2006b]、本論では、その概略のみを記述することにとどめる。

タイ語のバーンというのは、村という意味である。ホーというのは、タイ語による雲南系漢人と雲南系ムスリムの双方に対する他称であるが、その由来や意味についてはいくつかの説があるが、ここでは言及しない。モスクには、タイ語のほか、中国語名とアラビア語名が付けられている。中国語では、「王和清真寺」と呼ばれている。

9) 北タイの雲南系ムスリム一世からの聞き取りにもとづく。

バーン・ホー・モスクが成立した時期は、はっきりとは断定しがたい。1998年に筆者が入手した北タイのイスラーム委員会が作成した資料では、その成立は1890年となっている。一方、バーン・ホー・モスクの創立記念集では、設立年は1915年と記載されている。¹⁰⁾ このように、成立時期に関する内容には資料により若干の違いがみられる。他方、このモスクが雲南系ムスリムによって創設される以前の1877年には、すでに当地に居住していたインド・パキスタン系ムスリムと雲南系ムスリムが共同でチャンプアク（Chang Phuak）という名のモスクを設立していた。

これら2カ所のモスクの創設に関与していた雲南系ムスリムとして名を残している人物が2人いる。それは納パーサン氏と鄭崇林氏である。両氏の移住の詳細については別稿にて述べたのでここでは詳述しない¹¹⁾が、両者に共通していたのは、タイへの定着のきっかけが交易活動にもとづいていた点にある。

納パーサンは、雲南の玉溪地区・通海県納家营村出身であるといわれる。この村は、雲南のなかでもムスリムが集住する地域として知られ、現在チェンマイや北タイの各地に住んでいる雲南系ムスリムのなかにもこの村の出身者が多くいる。古老たちからの聞き取りによると、この村は少なくとも400年前に雲南で開村した経緯をもつ。そして、この村の村民は古くから交易商人として活躍し、納家营村から中国国内のみならず、雲南からビルマさらに北タイにまで商売のために南下していたという[高2001]。たとえば、後の個人史のところで事例としてとりあげる80代の在北タイの雲南系ムスリム男性も、おなじく納姓を名乗っていたが、この人の祖父や父も納家营村出身の交易商人であった。その父は1920年頃にタイに南下しチェンマイで亡くなっている。

他方、鄭崇林は、1887年ごろ、雲南を出発し、ビルマのシャン州で複数のキャラバンと交易したのち、北タイに入植してきた。ビルマから北タイへは、まずその国境付近にある交易地メーサイ（Mae Sai）に入り、その後、さらに南西に南下し、ランパーン（Lampang）、ランブーン（Lamphun）、ターク（Tak）、チェンマイというようにいくつかの地点をめぐりながら移動してきた。このうち、タイにおける最南端はターク県で、鄭氏はチェンマイに定着する直前までここに住んでいた。ターク県の対岸には、古くから交易地として栄えたビルマ領モーラミヤイン（Mawlamyine）があり、19世紀後半の雲南系ムスリムにとっては雲南からタイ経由でビルマへ抜ける重要な交易ルートのひとつだった。¹²⁾鄭氏はタークでタイ人の女性を娶った。彼女は、以前タイの首相であったタノーム・キティカチョンの遠縁にあたる女性だった。結婚

10) この本を元にしたと思われるSMC [n.d.]においても1915年と記載されている。他方、バーン・ホー・モスクの看板には民国6年、すなわち1917年と記載されている。

11) 王 [2006b] を参照。

12) Forbes [1987] は雲南系ムスリムの19世紀後半におけるタイやビルマにおける交易の展開について西洋の歴史文献を用いて記述している。

後 2 人は 5 男 5 女にめぐまれた。鄭氏は、タークから東に位置する北タイのメーチェム (Mae Chaem) などで交易を行ない、1915 年、現在のチェンマイのバーン・ホー・モスクの正面にある敷地に定住することになった。その後、1964 年にマッカ巡礼に出かけ、当地で亡くなった。鄭氏において特筆すべきは、彼は交易活動を通じて馬やラバを使ったタイの運送業などに貢献し、タイ名とタイ国籍、並びにタイ語でクンという称号を与えられた点である。¹³⁾

2.2.2 メーサリアン市

チェンマイには、20 世紀前半までに定着した雲南系ムスリムによってモスクが建立されたが、同じ時期に交易活動が行なわれていても、メーサリアン市では事情がことになっていた。以下では、筆者がメーサリアン市でインタビューを行なった馬氏の移住史を通して、この地における雲南系ムスリムの移動と定着の経緯をみていく。

馬氏は、1929 年、雲南省通海県の納家營村で生まれた。すでに述べたように、この村は雲南にあるムスリム集落である。ムスリムである馬氏は、幼いころから勉強熱心であった。村のモスクで宗教の勉強をしたり、近くのムスリム村落で英語やアラビア語を学んでいた。13 歳頃には、近隣にあるムスリム集落沙甸で、14 歳頃には、大庄で勉強した。

馬氏の一家は、祖父の代から交易に従事していた。馬氏が雲南から出国する以前にも、すでに祖父と父の弟が馬やラバを使って、はるばるメーサリアンまで商売に来ていたという。このうち、馬氏の父の弟がメーサリアンに定着した。馬氏も 16 歳頃から、馬の世話をしながら交易活動をはじめた。1947 年、馬氏が 18 歳の時、雲南を離れ、父の弟を頼ってメーサリアンに向かった。

馬氏は雲南からタイまで、つぎのようなルートを通ってきた。納家營村 [雲南] → 西双版纳 [雲南] → ケントウン (Kyaing Tong) [ビルマ] → ターキーレック (Tachilek) [ビルマ] → メーサイ [タイ] → チェンラーイ [タイ] → チェンマイ [タイ] → メーサリアン [タイ]。

馬氏は大所帯のキャラバン隊を組んで雲南からタイまでやってきた。その規模は 500 人から 600 人もいたといい、¹⁴⁾ それは彼の出身村とその近辺の交易者が合流した寄り合い交易隊だった。当時、中国からタイに来るまで歩いて、数十日間かかった。馬氏は知人の家を頼りながら移動した。北タイの国境付近にあるチェンラーイでは 10 日間ほど、またチェンマイでは数日間、知人の家で泊めてもらった。そのうち、今住んでいるメーサリアンまできたのは馬氏ひとりだった。

馬氏がタイに来た時、「同じ鍋を食った」仲間がひとりいた。しかし、彼はメーサリアンではなく、そこから北へ離れたクンユワム (Khun Yuam) という地点までしか南下しなかった。

13) MBH [1996] には、鄭氏の北タイ雲南系ムスリム社会に対する関わりと彼の偉業について記録されている。

14) しかし、この人数は疑わしい。別の雲南系ムスリムにキャラバン隊について尋ねたところ、せいぜい 100 人程度であろうと説明していた。

彼はクンユワムでカレン族の女性を娶り、そこに今でも住んでいるという。一方、馬氏はメーサリアンで北タイ人の妻を娶った。タイに定着してしばらくして、先にメーサリアンに定住していた叔父は亡くなり、馬氏家族だけがその地に残った。その後、馬氏家族に続いてメーサリアン一帯に定着する雲南系ムスリムは増えなかった。そのため雲南系のモスクはない。馬氏はその地にあるインド・パキスタン系ムスリムのモスクに通っている。

以上の馬氏家族の事例から、すでに 20 世紀早くからメーサリアン地区が雲南からのムスリムたちの交易路として開かれていたことがわかる。馬氏のみならず、彼の祖父の代からすでにこの地に南下していたからである。これは、遅くとも 20 世紀前半まで、かつてメーサリアンが雲南から陸路でビルマの海の玄関口であるモーラミヤインに通ずる交易の中継点であり、雲南系ムスリムがその地まで南下していたという流れと一致するものである [Forbes 1987]。このように、早くからこの地は雲南系ムスリムが交易のために開拓した地ではあった。しかし、馬氏の語りからもうかがえるように、雲南系ムスリムの多くはその地には定着するケースは少なかったため、そこに雲南系のモスクは今に至って建設されていない。

ちなみに、現在そこにはインド・パキスタン系のモスクが建っている。資料によるとそのモスク名はタイ語でヤミーアトゥン・イスラームといい、1993 年に発表されていた時点では教区員数は 60 世帯である。筆者も 1998 年にこのモスクを一度訪問したことがあるが、そこには雲南系モスクのように中国語で書かれた各種掲示はいっさいみあたらず、当然、モスク名にも中国語名はなかった。イマームもインド・パキスタン系と思われる。¹⁵⁾ このように、インド・パキスタン系のモスクがこの地に建てられた背景には、ビルマのモーラミヤインに通じたメーサリアンは、かつてはインド・パキスタン系ムスリムがタイへ移住する主要な経路のひとつであったことと深く関係している。¹⁶⁾ これに対して、20 世紀前半までのメーサリアンは雲南系ムスリムの交易路の一地点に過ぎず、彼らの多くは中国とタイを往来する生活を続けていた。また、後述するように、この地は 20 世紀後半に生じた雲南系ムスリムの移住経路でもなかった。その結果、メーサリアンには馬氏を含む雲南系ムスリムのわずかな開拓者が定着したが、人口は増えなかった。それゆえに、雲南系ムスリムのコミュニティとして発展しなかったのである。

以上、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、雲南系ムスリムは交易地点と結びついてタイへの定着を行なってきたことがわかる。それでは 20 世紀後半にはどのような移動形態があり、それが雲南系ムスリムの越境経験にどのような変化をもたらしたのであろうか。以下、20 世紀後半に生じた雲南系ムスリムの移動と深くかわる歴史的経緯を述べ、雲南系ムスリムの生

15) 1993 年の資料ではイマームはクンチット・アラムという。この名から中国系であるとは考えられず、その地の教区員の圧倒的多数を占めるインド・パキスタン系であると思われる。

16) SMC [n.d.] には、チェンマイにおけるインド・パキスタン系ムスリム社会の来住について記述されている。

活をとりまく政治的・社会的環境が彼らの移動と交易の変容にどのような影響を与えたのか概観する。

3. 20 世紀後半における雲南系ムスリムの移動とタイでの展開

3.1 2 つの移動波

20 世紀後半における雲南系ムスリムの移動は、彼らが従来依拠していた交易活動と必ずしも結びつくわけではなく、移動パターンにも変化がみられる。そのおもな原因は、中国国内の内戦や政変、さらに隣接するビルマにおける軍事的、経済的、政治的諸要因に直接的、間接的影響を受けたことである。そのため、この時期の移住者は中国で必ずしも交易活動に従事した経験をもつばかりではなかった。また、移住のプロセスも交易ルートにそって展開するというのではなく、その移動形態はどちらかというと避難民的要素が色濃いものだった。

20 世紀後半における雲南系ムスリムのタイへの来住は、移動を成立させた歴史的・社会的状況によりさらに 2 つの時期に分けられる。ひとつは、1950 年代から 1960 年代初頭までに北タイに定着したグループで、彼らのおもな移住要因は、1949 年前後の中国における政変にある。周知のように、中国では日中戦争終結後、それ以前から燦っていた国民党軍と共産党軍の対立が再燃し、内戦が続いた。結果的に共産党のリーダーである毛沢東が 1949 年 10 月に中華人民共和国を樹立することによって、内戦は表面的には終結したが、雲南のような中央から離れた辺境では 1950 年初頭まで両者の対立は続いた。結果的に 1950 年 1 月、雲南で国民党軍が敗戦する。20 世紀後半における最初の雲南系ムスリムの移民グループは、こうした中国における内戦にともなう社会不安、生活の疲弊や混乱をきっかけに、ビルマを経由してタイに避難してきた人びとである。この時期の移住者の特徴は、後述するようにビルマからタイへ定着する過程のなかで、北タイ国境に数多くの避難民集落である難民村を形成した点にある。

もうひとつの移住波は、北タイ国境に難民村が形成された 1950 年代初頭から 1960 年代初頭以後にタイに定着した雲南系ムスリム移民からなり、時期的にはおおそ 1960 年代半ばから 1990 年代までにあたる。¹⁷⁾ この時期は個人や家族単位による小規模な移住者が多いため、タイへの定着時期とその要因を特定することは難しく、さらに彼らの移動の動機、移動の形態やそのルートは個人レベルで多様化している。

以下ではまず、20 世紀後半に生じた最初の大きな移住の形態について記述する。

3.2 切れる絆 — 20 世紀後半初期の中国からの移動を促した要因

この時期の移動要因は、先にも述べたように、1949 年前後を境にした中華人民共和国の成

17) 1990 年代の移住者としては、在タイ雲南系ムスリムがビルマから親族をあらたにタイに呼び寄せるケースや出稼ぎを目的としたケースなどが含まれる。こうした移住目的は、2008 年現在においても行なわれていると思われるが、筆者は具体的なデータをもっていない。

立にともなう社会的動乱と生活不安にある。中国では、この時期に移動した人々を華僑として管理し、登録している。以下では、雲南系ムスリムの移住者を輩出した一母村、中国雲南省通海県納古鎮の資料をもとに、中国からいつ、何歳のときに雲南系ムスリムが出国したのかをみてみよう。

ここでは、雲南大学が通海県納古鎮にて村落調査を行ない、その報告書に添付されている1979年の『通海県華僑及僑眷登記表』という資料を用いる〔高 2001〕。納古鎮とは、納家营村とそれに接する古城村から構成される行政単位である。中国側の1979年の調査では、納古鎮の人口は4,929人おり、そのうち、タイに住んでいるムスリムはすべて男性で、計45名である。そのうちタイ北部のチェンマイ市での居住が判明しているのは19人である。残りは不明とされている。それらの資料を筆者が作成しなおしたのが表1と表2である。表1は中国におけるタイへの移住者の出生年、出国時期と出国年齢、中国に残された家族を示している。表2は、出国時期ごとの人数を示している。

表1 出生年、出国時期、出国年齢と中国にいる家族

番号	出生年	出国時期	出国年齢	中国にいる家族	番号	出生年	出国時期	出国年齢	中国にいる家族
1	1934	1948	14	兄	24	1922	1948	26	息子
2	1943	1958	15	兄	25	1922	1948	26	妻
3	1934	1950	16	兄	26	1919	1947	28	息子
4	1933	1950	17	弟	27	1929	1957	28	息子
5	1931	1948	17	姉	28	1919	1948	29	妻
6	1929	1948	19	オイ	29	1919	1948	29	弟
7	1929	1948	19	弟	30	1919	1948	29	息子
8	1927	1947	20	弟	31	1919	1948	29	妻
9	1929	1949	20	弟	32	1917	1947	30	妻
10	1927	1947	20	オイ	33	1919	1949	30	娘
11	1924	1945	21	オイ	34	1919	1950	31	娘
12	1924	1945	21	兄	35	1918	1950	32	妻
13	1927	1948	21	弟	36	1944	1977	33	兄
14	1928	1949	21	妻	37	1917	1950	33	息子
15	1927	1948	21	父	38	1914	1948	34	息子
16	1924	1946	22	息子	39	1921	1958	37	娘
17	1929	1951	22	妻	40	1909	1948	39	妻
18	1924	1947	23	弟	41	不明	1946	不明	妻
19	1921	1945	24	息子	42	不明	1947	不明	息子
20	1934	1958	24	姉	43	不明	1948	不明	妻
21	1924	1948	24	兄	44	不明	1948	不明	兄
22	1924	1948	24	娘	45	1950	不明	不明	兄
23	1924	1948	24	妻					

これらの表からつぎのことが読み取れる。第 1 は、リストに載っている人がすべて男性であることから、タイへの移住者は男性が主体であった点がわかる。ちなみに、筆者はタイに住む雲南系ムスリム一世を対象にした調査の過程で、雲南から移住してきた女性を複数名インタビューしたことがあるが、その場合はすでに中国で結婚し、夫婦でタイへ移住したケースや、姉妹で中国から脱出し、途中で他の雲南系ムスリム男性などと結婚することによって、北タイに移住してきたケースに限られていた。このように、女性だけで中国から移住することは、当時は非常に困難であったと考えられる。

第 2 に出国年齢について確認されたのは 45 名中 40 名である。そのうち、もっとも若い 10 代半ばから 10 代後半にかけての出国者が 40 名中 7 名いることは興味深い。彼らの家族構成を中国に残っている家族との関係でみると、多くの場合、彼らの兄弟姉妹やオイが含まれている。ここから、彼らは中国では結婚せず、独身のままタイに移住してきた可能性が高いと思われる。他方、20 代に移住した者の数は最も多く、40 名中 24 名にのぼり、全体の半数以上を占める。この年齢の人たちになると、中国に残っている家族としては、兄弟姉妹やオイにくわえて、妻や息子が含まれている点に特徴がある。その数は、24 名中 12 名を占めている。こうした傾向は 30 代で出国した人たちの場合には顕著にみられる。30 代に出国したのは 40 名中 9 名おり、9 名のうち、中国に子どもや妻がいる人は 8 名である。ここから、タイへの移住者は早い人で 10 代半ばからはじまるが、出国年代としては 20 代が最も多く、30 代半ばがそれに続く。また、20 代、30 代に出国した人たちは、中国ですでに結婚し、場合によっては子どもをもっていた場合のあることがわかる。言い換えるなら、この年齢の移住者は、いわば家族を捨てて祖国を出国したのである。後ほど述べるが、中国で扶養家族がいる移住者は、移住先のタイで再婚するのが一般的だった。

表 2 出国時期

出国時期	人数
1945	3
1946	2
1947	6
1948	19
1949	3
1950	5
1951	1
1957	1
1958	3
1977	1
不明	1
	45

第3に出国時期についてみると、45名中出国時期が判明しているのは44名である。最も早い移住者は1945年であり、出国時期のピークは1948年である。しかし、その前後の時期をつうじて断続的に移住者が続き、1951年まで毎年のように出国者が出ている。それ以後の移住者は44名中5名と落ち込む。こうした移住の波は、中国で共産党政権が樹立された後、しだいに国境管理が厳しくなり、ついには閉ざされたことを反映している。ここで興味深いのは、中国で政変が起こった1949年や雲南で国民党が敗北する1950年以前に、すでに中国から脱出していた人たちが少なからずいたということである。大きな歴史的事件が生じる前から、すでに民衆はこの土地での生活に不安を感じ、迫り来る政変の恐怖を察知して新しい土地への脱出を試みていたことがわかる。

つぎに述べる北タイに住む雲南系ムスリムの古老から聞いた経験談は、移住をめぐる当時の社会状況の一端を示している。

1947, 48, 49年ごろから、共産党は人民に対する残虐行為をはじめた。1952, 53年ごろからようやく、毛沢東が本当の意味で国を治めはじめ、少しは残虐行為が緩和されるようになった。1947, 48, 49年ごろの雲南の民衆はなんとかビルマとの国境地域に脱出した。そこには、リス、アカ、ヤオ、仏教徒、ムスリム、キリスト教徒などあらゆる人たちが含まれていた。この頃の共産党は、金をもっている人を狙い、土地、金、馬などの財産を奪った。[中略] 貧しい人は金をもっている人を見つけては、共産党に密告した。むりやり金持ちを捜し出す場合もあった。[中略] これを恐れた人たちはみなビルマ側へ逃げた。¹⁸⁾

またつぎのような事例もある。北タイのチェンマイ市に住む70歳代の雲南系ムスリムの李さんは、1950年に単身で雲南から脱出した。その理由は、彼の家族が所有していた土地がすべて政府により没収されたうえ、李さんの母が拷問を受けたからである。李さんの母は李さんが故郷を離れて生き延びることを強く願い、自らは村に残った。李さんは雲南に残した家族と故郷の写真を胸に抱いて脱出した。その後、李さんはタイで知り合ったビルマ生まれの雲南系ムスリムと結婚し、子どもを3人もうけた。李さんの両親はなくなったが、雲南を離れ、寧夏回族自治区に嫁いだ李さんの姉がまだ生きている。

3.3 タイにおける「難民村」― 集落形成背景としての国民党軍とその影響

さて、以上のように雲南系ムスリムは、中華人民共和国誕生を境にする1949年前後にタイへ移動した。雲南からビルマに一斉に逃げ出した人たちは、ビルマで逃げ場を求めてばらばらになった。その際、ビルマの内陸部はビルマ政府の管理が厳しいので、雲南とビルマの国境線

18) 1998年9月17日、チェンマイ市に住む雲南系ムスリム一世の70代男性からのインタビューより。

沿いから移動したケースが多いという。たとえば、雲南省通海県出身の男性はつぎのようなルートを使った。通海→景洪→橄欖巴→大勐龍 [以上中国領] →モンシャン¹⁹⁾ →モンパリャオ (Mong Pa Liao) →モンリン (Mong Lin) →ホンレー²⁰⁾ →ターキーレック [以上ビルマ領]。また、場合によっては、通海→打洛 [以上中国領] →モンパン (Mong Pang) →モンシン²¹⁾ →ターキーレック [以上ビルマ領] というルートもあった。

この時期の移住者は、ビルマでの滞在経験は長くない。彼らは当初、ビルマに避難したのち、中国の社会情勢が好転すれば、いつでも祖国に帰るつもりでいた。しかし、結果的に彼らの夢はかなわず、逆に、ビルマで予期せぬ運命をたどる。というのは、雲南系ムスリム移民は、ビルマでの滞在期間中に、中国から 1950 年以後に敗走してきた国民党軍の軍事的活動に直接的、間接的に巻き込まれたからである。

本稿では、その詳細は述べないが、国民党軍はビルマで軍事的拠点をあらたに設けて、ビルマを拠点に中国に対して反共戦争を展開した [Chang 1999]。その際、軍事力の拡大のため、兵員増強ならびに食糧・軍事物資の調達が不可欠となった。国民党軍はこの時に、当時、ビルマに避難していた雲南系ムスリムにも協力を求めたのだった [王 2007]。こうした国民党軍の軍事活動はビルマ政府の反感を買い、敵視された。その結果、1953 年と 1961 年の 2 度、国民党軍は国連からの通告を受け、ビルマからの撤退を求められた。その一部の軍隊が、北タイに再移住した。

国民党軍と一口にいても、さまざまな出自をもつ人びとが含まれているが、民族的には雲南出身の漢人が圧倒的多数を占めていた。したがって、彼らからみれば、雲南系ムスリムは周縁に位置する [王 2004, 2006a]。

では、ビルマにおける国民党軍の動きを受けて、雲南系ムスリムはどのようにタイへ定着したのだろうか。雲南系ムスリムと国民党軍の関係については不明確な点も多いが、彼らのなかにはさまざまな選択があった。ある人は、国民党軍に入隊し、ある人は、食糧や軍事物資などを国民党軍に提供した。逆に、国民党軍とはいっさい利害関係をもたず、ビルマで生活をのいでいた人もいた [Wang 2006]。しかし、雲南系ムスリムはビルマ政府からは国民党軍同様に敵視された。そのため、雲南系ムスリムも国民党軍と同時期にビルマ軍から追撃され、タイへの再移動を余儀なくされた。

その結果、北タイ国境には 1950 年代初頭から 1960 年代初頭にかけて、漢人主体の国民党軍とそれに追従しながら移動してきた雲南系ムスリムによる避難民集落が多く形成された。

たとえば、チェンラーイ県のメーサローン (Mae Salong) 村は、1961 年に雲南系漢人のリー

19) 場所不明。

20) 場所不明。

21) 場所不明。

ダーである国民党軍によって形成された。2007年8月の時点で、約30世帯の雲南系ムスリムが居住していたが、彼らは圧倒的多数の漢人のなかで少数派として暮らしていた。この村の雲南系ムスリムたちは1980年代半ばに当時の国民党軍第5軍の軍長であった段將軍が逝去するまで、漢人と共同で国民党軍の軍事的規律のもとで生活を送っていた。聞き取り調査に協力してくれたこの村に住む40代の雲南系ムスリム二世の李氏によると、李氏の父は雲南の西双版纳にある景洪出身で、1949年前後に雲南を離れ、1950年代にビルマで雲南系ムスリムが統率する国民党軍部隊に入隊したという。

一方、チェンマイ県のバーン・ヤーン（Ban Yang）村は、1998年に筆者が調査した時点で村の戸数は250戸であった。そのうち、雲南系漢人は200戸前後、雲南系ムスリムは50～60戸であった。村人からの聞き取りにもとづくと、この村は1953～54年ごろに成立した。この地に雲南系漢人と雲南系ムスリムが南下してくる前は山地民のカレン族が住んでいたという。当時の住まいは、ほとんどが草葺きの家だった。また、周囲の山道は険しく、道もほとんど舗装されていなかった。

以上に述べた雲南系漢人と雲南系ムスリムがビルマの戦乱から逃れて北タイに作った集落は、中国語で難民村と呼ばれる。難民村は当初30数カ所にすぎなかったが、2000年現在では90カ所以上に増加した〔王 2008b〕。

4. 20世紀後半の移住者たち（1） — 1950年代から1960年代初頭まで

以下では、中国で交易に従事したことがあり、筆者が詳しく話を聞くことのできた2人（納氏と王氏）の事例を中心に、1950年代から1960年代初頭までの時期に、雲南系ムスリムが、中国の政変、ならびにビルマ軍の追撃を経験するなかで、どのように移住し、それがどのようにに交易活動に影響したのかを詳しくみていく。この時期の移住者は、中国からの出国要因はほぼ共通しているが、タイへ定着していくまでの越境のルートや交易の経験にはヴァリエーションがみられる。そのことは、中国における雲南系ムスリム社会の交易をめぐる地域差や、諸個人をめぐる家族的状況や親族ネットワークの有無と関係している。

4.1 納氏の場合（雲南省通海県出身） — 代々の交易家族にみる越境と交易の変容

4.1.1 家族と交易への関わり

納氏は2008年現在、チェンマイ県チェンマイ市に住んでいる。²²⁾ 納氏は1919年、雲南省南部の通海県納家营村に生まれた。この村は前節で述べたチェンマイ市における雲南系ムスリムの先駆者である納パーサンの出身地である。この村は古くから馬やラバによる交易活動が盛んであった。大多数がムスリムからなっている。

22) 納氏へのインタビューは1998年から2008年まで断続的に行なわれた。

納氏には両親、1 人の姉、2 人の兄がいた。長女は納氏が生まれる以前に、3、4 歳の時に死んだ。長男は、納氏より 7 歳上、次男は納氏より 3 歳上だった。納氏の家族は、代々交易によって生計を立てていた。少なくとも、納氏の祖父の代から交易に従事していた。納氏の父は、チェンマイで 1921 年頃に亡くなり、先に述べた納パーサンが創設に関与したチャンブアク・モスクの敷地内に埋葬された。このように、納氏の父は、納氏がタイに移動する前から、すでに雲南から北タイへと越境していたのである。

納氏が交易活動をはじめたのは、18 歳の頃である。しかし実際には、12 歳ぐらいから馬・ラバの世話や交易と関連する下仕事を 7 歳上の長男から教えてもらっていた。納氏が筆者に教えてくれた交易活動はつぎのようであった。

納氏は交易活動に馬とラバを使った。こうした家畜は家畜市で購入することが多かった。納氏の住んでいた通海県には、七街という場所があり、ここでは 10 日に 1 回、家畜市が開かれていた。馬やラバのほか、牛、羊、猪なども売っていた。当時、家畜商人には漢人もいれば、ムスリムの人たちもいた。²³⁾

ラバは馬よりも値段が高く、だいたい 2 頭の馬が 1 頭のラバの値段に相当する。ラバも馬も 1 頭で 60 kg の荷物を運ぶことができるが、ラバの値段が高かったのは、ラバは物わかりがよく、体も丈夫で、馬のように道中あちらこちらよそ見をしない点が使いやすいからである。

納氏はできるだけラバを買うようにしていた。交易に連れていく馬やラバの数は状況により異なっていたが、だいたい 7、8 頭から多い時で 10 頭だった。交易活動は想像以上につらい仕事であり、「馬やラバはおなかいっぱい食べさせないと働かない。おまけに、馬やラバも歩きつかれて、その世話をしないといけない。道中は蚊にもさされる。“赶馬”という仕事はほんとうに大変だった」と、納氏は語る。

4.1.2 ビルマでの交易

納氏がはじめて交易でいった場所は、ビルマのセントウンであった。18 歳の時、兄と 2 人の馬の世話人にくわえ、馬やラバ 10 頭を引き連れていった。²⁴⁾ 当時、中国はまだ国境を閉ざしておらず、雲南とビルマは比較的自由に往来ができた。納氏と兄は、8 年間セントウンと雲南を往復した。セントウンに出かけるのは基本的に年 1 回だった。

その際、ビルマのセントウンに拠点をおいたが、実際には、雲南の国境に近い、西双版纳付近に位置する勐海が重要な交易地点だった。勐海とセントウン間は急げば 7 日、普通に歩けば 8 日間はかかった。この両地点の移動には、たとえばつぎのようなルートがあった。勐海

23) この市場は納家營村の近郊にあり、現在では 4 日に 1 回開かれている。筆者は納氏とともに 1999 年 5 月 4 日、この家畜市を訪問した。

24) 別のインタビューの時には、通常兄と納氏でそれぞれ 3 頭ずつ、手伝い人は 4、5 人、合計 5、6 頭の馬やラバを連れていたといっていた。

→勐混→勐板→打洛〔以上中国領〕→モンマー²⁵⁾→シャオハイチャン²⁶⁾→ケントウン〔以上ビルマ領〕である。また、勐海から景洪へいき、そこから大勐龍を通過して、ビルマのケントウンへいく方法もあるという。納氏は詳しく説明はしなかったが、どのルートを使うかは、交易の状況しだいが変わっていたと思われる。

ビルマへ入境すると、そこにはイギリス人が常駐し、彼らから通行証をもらう。そのための尋問を受ける。これらの英国人はシャン語²⁷⁾と中国語を話すことができたので、納氏も2つの言葉を混ぜながら彼らと会話したという。イギリス人は通行証を発行するために、納氏に対して「あなたはどこから来て、どういう目的でここに来たのか」と尋ねる。納氏は「商売のために〇〇に来た」と答える。その後、イギリス人に英国幣を支払って、通行証を発行してもらう。当時は英国の銀貨が貨幣として流通していた。中国から出国する時には何も証明書のようなものをもっていかなかったが、イギリス領ビルマに入ると、このように自分の身元と入国の目的をはっきりさせ、証文を手に入れてようやく交易活動ができたのだという。²⁸⁾

それでは、納氏は8年間、ビルマと雲南の国境でどのような商品を取り扱っていたのであろうか。興味津々で聞く筆者の予想とは反して、納氏はなかなか詳しく語ってくれなかった。ようやくわかったのが、サイの皮、鹿茸（鹿の袋角）などの森林産物である。これらの森林産物をビルマから雲南の勐海へ運び、そこで商品を売る。だが、帰路にどのような物資を運んだのかについては、納氏は一言も教えてくれなかった。しかし、これまでに収集した複数の雲南系ムスリムからの情報から推測すると、ここで考えられる重要な交易品はアヘンである。ある北タイ在住の雲南系ムスリムは、ビルマではアヘンと鹿茸などの交易業と賭博業がとても盛んであったと語ってくれた。²⁹⁾

4.1.3 雲南での交易

納氏は30歳に雲南から出国するまで、雲南域内でも交易を続けていた。雲南ではどのような交易品を取り扱っていたのであろうか。

そのひとつは塩である。塩の交易について納氏は詳しく教えてくれた。塩の産地として雲南では磨黒が有名だった。磨黒は思茅地区内にある。納氏は、2ヵ月に1度、³⁰⁾ 通海→峨山→元江

25) 場所不明。

26) 場所不明。

27) ビルマに住むタイ系民族の言語。

28) 当時のビルマにおける徴税システムは、それほど厳密に行なわれていなかった。納氏によると、徴税官は交易人の年齢をみて、税額を決めていたという。若い交易人であれば、年配の人に比べて徴税額は低かった。また、厳密さに欠けるという点では、馬やラバにどんな商品が積まれているのかについても、詳しくは調べなかったという。納氏によると、たとえ自分が10 kgの荷物を積んでいたとしても、5 kgしかないといえ、そのまま通行は許可されたという。交易品によって税額は変わった。

29) 西洋人の記録でも19世紀末以後における雲南—ビルマ間の雲南人による交易の重要な商品としてアヘンを指摘している。[Forbes 1987]などを参照。

30) 別のインタビューの時には、20日に1度といった。

→墨江→磨黒というルートをたどって、塩を買いつけにいった。村を出発して磨黒まで到着するのに片道 12 日はかかった。地下から掘り出した岩塩は、水で煮た後に乾燥させ、大きな鍋をひっくりかえしたような形で地べたに積まれて売られていた。街には塩を専門とする商店が 10 軒以上もあり、その経営者は漢人が多かったという。どの店でも塩の値段はほとんど変わらなかった。納氏は、磨黒で塩を購入して、村にもち帰り、さらにそれを納家营村からおおよそ 10 km 離れた通海にもっていく。納家营村の付近では、通海がもっとも大きな市場だった。納家营村と通海の間には湖があり、商人たちは通常、湖を行き来する船を利用して交易物資を納家营村から通海まで運んだ。

納氏は、塩の交易のほか、タバコや、つぎに述べる布匹、白銀、蔵紙などを商品として売買していた。布匹とは山地民が綿花から作った各種綿製品を指す。当時雲南でとてもよく売れたという。納氏はこれを磨黒に住む山地民から購入し、交易の途上で売りさばいた。白銀とは、貨幣などに鑄造されていない銀の塊のことである。これらを納氏は、雲南の西双版纳に住むタイ族やハニ族に売った。ハニ族は白銀から首飾りを作っていたという。また、タイ族はそれを大事にしまっておいて、お金の代わりに利用した。蔵紙とは、白色の羊毛から作った布のことである。いろいろな使い方ができ重宝するため、売れ行きもよかった。ハニ族などの山地民は、蔵紙を縫って服を作っていた。特に季節の寒い冬には蔵紙で作った服は防寒性がよく、暖かくて便利だった。また蔵紙は、馬にかぶせて、雨よけに使うこともできるし、敷物がわりにしてその上で寝ることもできた。タバコは、重要な交易品のひとつで欠かせなかった。通常、馬やラバが 10 頭いれば、その半分はタバコを積んだという。

このほか、興味深い商品としては馬やラバがあった。馬やラバといえば通常、商品の運搬のために使うと考えられるが、当時はこれらも重要な交易商品になっていた。家畜はつぎのような方法で売られた。たとえば、納氏が納家营村を出発するときに、馬やラバを合わせて 10 頭ほど連れていくとしよう。そのうち、通常、最低 2 頭、場合によっては 3 頭を自分たちの食料を積むために使う。そして、残りの 7, 8 頭を交易の途中で売り払い、現金をえた。納氏は、村を出発するときに通常 13, 14 頭の馬やラバを連れていったという。当時、中級のラバ 1 頭の値段は、馬の約 2 倍から 3 倍の値段がした。

以上の商品にくわえて、当時、納氏が取引をしていた商品として考えられるのがアヘンである。しかし、納氏は、ほとんどその詳細について教えてくれなかった。「当時すでに中国政府はアヘンの商売を禁止していた。違法行為でした」とポツリと語った。また、アヘンは墨江、元江、普洱、瀾滄などで栽培されていたか、あるいは売られていたともいっていた。このうち、納氏は、瀾滄に年に 1 回、多い時で 2 回必ず決まった時期に定期的に出かけていった。

特に、**瀾滄**のモンツ―³¹⁾ という場所は、雲南のなかでも一大交易地のひとつであり、納氏以外のムスリム商人も集まり大賑わいであったという。

4.1.4 ビルマへの移住と変容する交易

納氏は、1941年、22歳の時に納家**營村**で結婚した。その後、3人の娘を授かった。納氏は、結婚後も交易活動を続けたが、中国の情勢がしだいに悪くなるにつれ、雲南から避難することを考えはじめた。特に日中戦争後の雲南は、内戦状態が続き不安定であった。「村には国民党の後に共産党が入ってきて、土地は荒れ、交易なんかできるような状態ではなかった。村人たちは、蒋介石は悪い、共産党は良い、とかいろんなことを言いあっていた」と納氏は語る。

ついに、1949年8月、納氏は妻と3人の娘を残して、雲南を離れた。まだ国境が閉ざされていなかったこの時点では、交易を目的に越境することは可能だった。そこで納氏は交易を名目に出国を考えた。その際、妻子を連れて交易活動を行なうことはかえって不信感をあおるだけと判断し、妻子は中国に残すことにした。

村を出たのは30歳の時だった。そのとき9、10頭の馬を連れ出した。当時、納家**營村**から一緒に脱出した人には、約70、80人もいた。同時期、納氏が親しくしていた7歳上の長兄も、納氏より約1年おくれて、納家**營村**を脱出した。長兄は、西双版纳の**勐海**に逃れた。兄はその後、**勐海**に住み続け、52、53歳（換算すると1964、65年）で亡くなった。納氏にとっては、妻や娘のみならず、こうして移住の過程で兄と離別したことは、とてもつらい悲しみとなった。

納氏がビルマに入植したのは1949年であった。当初、納氏は交易をしながらビルマでの生活をしのぎ、内戦が終了すれば故郷に戻ろうと考えていた。しかし、その願いは実現できなかった。雲南から国民党軍がビルマに敗走し、当地に滞在していた雲南系ムスリムを動乱に巻き込んだからである。先にも述べたように、雲南系ムスリムのなかには、ビルマで国民党軍に入隊した者もいた。納氏は軍隊には入らなかった。

しかし、この間の生活は非常に苦しく、「言いたくない」といって詳細はほとんど筆者には教えてくれなかった。どんな交易商品を扱っていたのかについても口を閉ざしたままだった。

ただ、ビルマにおける移動地点だけは断片的につぎのように教えてくれた。すなわち、ターキーレック [ビルマ領] ⇄ メーサイ [タイ領] ⇄ モンサット (Mong Hsat) [ビルマ領] ⇄ タンヤン (Tangyan) [ビルマ領] である。このように、納氏は、一時的にタイ領に南下してはいるが、基本的にはターキーレックとビルマの内陸のタンヤンを往復する生活をおくっていた。ターキーレックとタンヤンはとても重要な交易地点であったようで、両地点を往復する暮らしは3年間も続いた。

31) 場所不明。

タンヤンには、当時、納氏以外にも雲南人がたくさんいた。その人口については詳しくわからないが、割合としては雲南系漢人が約 70%、雲南系ムスリムが 30%住んでいたという。また、ターキーレックとタンヤンは片道 7 日かかったという。複数の雲南系ムスリムたちからの聞き取りを重ねると、このルートではおそらくアヘンが交易品として取り扱われていたと思われるが、納氏は、いっさい教えてくれなかった。³²⁾

こうした生活も長くは続かなかった。国民党軍ならびにそれと同一視されていた雲南系ムスリム交易者はすべて、ビルマ軍から攻撃されたからである。ビルマでの納氏は、一方で交易活動をしながらか、他方で絶えずビルマ軍の攻撃から逃げようとしていた。そして、ついに納氏は国民党軍のビルマからの第一回撤退勧告が出された 1953 年の翌年、タイへ避難する。

4.1.5 タイでの生活

納氏はビルマから国境に隣接したタイ北部ドーイ・アンカーン (Doi Angkhang) 山を越えた。そこでは、ビルマ政府の追撃を受け、避難してきた雲南系漢人や雲南系ムスリムたちと生活をともにした。移住時、ドーイ・アンカーン山に住んでいた人は圧倒的に雲南系漢人が多かった。納氏を含め雲南系ムスリムは約 10 軒しかなかった。³³⁾ そこには、国民党軍人もいれば、納氏のような交易人たちも含まれていた。その数がどの程度であったのかは詳しくはわからない。納氏は、この山に約 3 年間住んだ。この山にある難民村は「馬康山村」と呼ばれ、今でも当時の移住者が暮らしている。

その後、1956 年、納氏はドーイ・アンカーン山の中腹にあるバーン・ヤーン村に再移動して、2 年間暮らした。当時、ここには約 30 軒から 40 軒の雲南系ムスリムが生活していた。タイに定着した当初、雲南系ムスリムが従事できる仕事はほとんどなかった。唯一生活の糧になりえたのは、彼らが雲南やビルマで経験していた交易活動であった。納氏も例にもれず、タイで暮らしはじめてから、タイの山地民が栽培したケシなどと平地で売られている日常品を売買する交易を開始した。

バーン・ヤーン村に住む雲南系ムスリム二世は、当時の雲南系ムスリム一世たちの交易活動についてこのように語っている。

雲南人たちは、数人で隊を組んで、ファン (Fang)³⁴⁾ から牛車に商品をバーン・ヤーン村まで運び、それから馬やラバに切り替えて、山の村に商品を売っていた。交易活動は親しい者

32) タンヤンという場所は、ビルマのなかでもアヘンの産地として知られている。

33) こうした状況は今でも変わらず、現在、ドーイ・アンカーン山には筆者が調査した限り、3 つの雲南人集落があることがわかっているが、3 つの集落のなかでムスリム系の雲南人が住んでいるのは 1 か所だけである。バーン・ルアン (Ban Luang) 村という。

34) バーン・ヤーン村から南下した地点にある小さな田舎町。

どうしてグループを組んだ。小さい場合は数人で行っていた。³⁵⁾

納氏は平地と山地を往復する生活をしながら、当時すでに北タイ・チェンマイ市に定着していた雲南系ムスリムの先駆者鄭崇林氏やその親族らと知り合う。その後、納氏は鄭氏の親戚にあたる娘と結婚し、チェンマイ市に住居を構えることになった。

4.2 王氏（雲南省墨江哈尼族自治县墨江出身）― 組織化された交易活動を経て、先駆者の住むタイへの越境

4.2.1 家族と交易への関わり

王氏は2008年現在、チェンマイ県チェンマイ市に住んでいる。³⁶⁾ 王氏は1920年、雲南の墨江にある碧溪に生まれた。長男で、2人の弟と3人の妹がいた。王氏は雲南生まれの漢族であったが、以下に述べるように交易活動を通してイスラームに帰依し、ムスリムとなった。王氏は改宗後から現在に至るまで、ムスリムとしての宗教実践を行ない、かつ自らも雲南の回族と自称している。

王氏が交易活動をはじめて経験したのは15歳の時であった。王氏の場合、交易人の仕事は、まず老板のもとで修行することからはじまった。老板というのは、商売上の主人である。これに対して、すでに述べた赶馬人は雇われ人であり、交易に直接関わる実働部隊であった。王氏は15歳から老板の家にいき、家事、水汲み、食事などの下働きを行なうようになった。その後、16歳の時から赶馬人の仕事をまかせられた。王氏はその後、何度か老板を替えるが、思茅で出会ったムスリムの老板と出会い、その人格に惚れ、イスラームに改宗した。

納氏と異なり、王氏は雲南以外の地域にでかけていった経験はない。ただし、王氏の老板が営む商店がバンコクに支店を開き、当時、雲南とラオスとタイを結ぶ商売を展開していた。王氏はタイのバンコクからラオスを経由して雲南に入荷される品物を雲南国内で運搬していた。たとえば、タイから運ばれてきた象牙、外国製染物、鹿茸、綿製の布³⁷⁾ はラオスのムアンシン(Muang Sing)を経由する。そこで王氏はラオスのムアンシンから運ばれてくる交易商品を雲南側の勐醒までキャラバンを率いて取りにいく。その後、雲南の西双版纳にある景洪から墨江や元江を通過して、昆明へ運ぶ。

王氏は交易商人の生活は、とても厳しくつらいものであったと振り返る。特に、交易人は銃を絶えず持ち歩き、山賊から身を守る必要があった。そして、交易人が移動するときは商品を守るため必ず集団で行動した。また、商品を地域間で移動させる際には、移動通過地点におけ

35) 1999年2月22日、チェンマイ市に住む雲南系ムスリム二世の男性からのインタビューより。

36) 王氏へのインタビューは1998年から2008年まで断続的に行なわれた。

37) 綿製の布にはさまざまな色と種類があり、たとえば雲南語では以下のような産品が含まれる。すなわち、大赤布（赤色）、士林布（藍色）、直貢布（黒色）である。

るそれぞれの老板の指示を仰いだ。すなわち、通常、交易活動にはキャラバン隊が直属する老板は同行しておらず、老板は商店がある地元に残ったまま、商売ネットワークを利用して、移動通過点に住む知人の老板と連絡をとって商品を運搬させたからである。

王氏は、交易人と老板の関係について次のように説明してくれた。

交易人が移動する時、すべて老板の許可を受けないといけないのです。たとえば、わたしがある場所から A、B を通過して、C という地点にいくとします。この場合、私の老板は事前に A 地点の老板にまず手紙で連絡しておく。ただし、どの地点でもいいのですが、1 人でも知っている老板がいればいいんです。そして、A に着いたら、私たちのキャラバン隊は、A 地点の老板のもつキャラバンに合流して、一緒に B へ移動します。もしさらに C 地点に進みたいときは、A、B、C それぞれの老板が互いに協力します。A、B、C の老板が連絡を取り、キャラバン隊は相互に協力しあいます。交易人は決して少人数では行動できないのです。山賊に攻撃される可能性が大きいのでね。老板は何十丁の銃と何十頭の馬をもっていて、それをキャラバン隊に配備してくれるのです。

このように、王氏のキャラバン隊は納氏のように兄弟で小規模に運営されていたのではなく、雲南、ビルマ、タイにまたがって商売を展開する老板の指示にしたがって組織化されていた点に特徴がある。

4.2.2 雲南からの離村とビルマ・タイへの移住

王氏は、1947 年に雲南を出国した。当時の雲南はすでに述べたように内戦で荒廃していた。出国以前、王氏は雲南の玉溪出身のムスリム女性とすでに結婚していた。そこで、王氏は妻を連れて、雲南から出発した。王氏は出国した時、「妻には馬の上に乗ってもらい、自分は歩いた。自分たちは馬を使って出国したので、私たちよりも後から出国してきた人たちとは随分状況は違いますよ」と語ってくれた。このように、王氏の場合は、まだ国境は厳格に管理されておらず、ビルマへの移住は比較的スムーズであったようである。

王氏は雲南の元江から西双版纳を経由し、さらに国境の町である打洛を通して、ビルマのセントウンに向かった。セントウンに雲南系のモスクがあったことは彼が移動するうえでひとつの目標となった。セントウンでの滞在期間は明らかではないが、王氏は長くて数週間か数ヶ月間、セントウンに滞在しただけである。

その後王氏は、歩いて 2 日間を費やし、ビルマ・タイ国境のターキーレックに移動した。そこにはおなじく雲南系ムスリムの知人、馬氏が暮らしていたからだ。馬氏は 3 人兄弟で、タイのチェンラーイ生まれの雲南系ムスリム二世だった。馬氏の父が中国からタイのチェンラーイに移住し、チェンラーイとターキーレックの両方に家をもっていた。王氏は馬氏に頼み

こんで、ターキーレックの家で数ヵ月間、避難生活を送った。

しかし、数ヵ月もたたぬうち、王氏はタイのチェンマイに再移動した。移動先のチェンマイには、妻方の親族がすでに住んでいたからである。彼らは、妻の父の妹や妻の祖母たちであった。また、チェンマイには妻の同郷人がすでにたくさん住んでいた。このうち、もっとも頼りになったのは、妻の妹であった。この義妹は王氏が来る10年以上も前に雲南から移住してきており、同じ雲南系ムスリムの男性と結婚していた。彼女たちは、王氏がタイに移住する以前にタイ国籍を取得していたうえに、自分の家ももっていた。王氏は、まず義妹の家で数日間滞在させてもらった。その後、王氏はバーン・ホー・モスクの先駆者である鄭氏の一族にも世話になり、彼らの所有していた家で一時的に借家生活をさせてもらった。

しかし、タイに移住してきた王氏家族の生活を安定させるため、王氏も多くの雲南系ムスリムと同様、山地民を対象にしたアヘン交易に従事した。王氏はチェンマイに住居を構えながら、メーサリアン県の山地に住むモン族が栽培するケシとチェンマイで仕入れた塩などの日常品との交易を行っていた。タイに定着当初は雲南系ムスリムの老板のもとで雇われていたが、その後、十数年たった後、資本金をもち合わせて仲間4人で商店を運営しはじめた。取り扱う商品はアヘンであることには変わりなかった。

このように王氏の事例は、さきの納氏とは雲南における交易範囲が異なっている点は興味深い。納氏の場合は、その父の代から雲南―ビルマタイにまたがって交易を展開していた。他方、王氏の場合には、雲南―ラオス―タイ間のつながりを示している。また、王氏の移住のプロセスは、雲南系ムスリムの先駆者を通したネットワークによって支えられている点にも特徴がある。この2人の事例は、中国からの移住要因だけをみていては、諸個人の間にみられる移動過程における経験の差異やそれを取りまく親族・家族的ネットワークを見逃してしまうことを示唆している。

5. 20世紀後半の移住者たち(2) ― 小規模の移動

上の2人の事例は、1949年前後の中国における政変を機に祖国を離れ、北タイに定着した人びとである。つぎに述べるのは、第1期の移住波が収束したのちに、あらたに移民してきた人びとである。この時期の移動の特徴は、中国、ビルマにおける政治的、経済的变化が絡みあい、移動要因をひとつに収斂させるのが困難な点にある。しかし、特徴的なのは、彼らは1950年代以後に定着した雲南系ムスリムのコミュニティを定着の際の足がかりとしている点にある。以下では、移動を促した複数の要因を3人の事例にもとづいて考察する。また、個人の移動の動態を捉えるのみならず、移動の歴史的状況に応じて、どのように交易活動が変化したのかについても着目する。

5.1 馬氏の場合（雲南省保山市出身）― ビルマにおけるムスリム間の結婚と移住

5.1.1 生まれた背景と交易活動

馬氏³⁸⁾ は 1922 年 3 月 4 日、雲南の保山市にある施甸のムスリム集落で生まれた。村名は西山村という。馬氏の家系は、もともと南京に祖籍をもち、馬氏は第 24 代目である。第 12 代から雲南方面の大理に南下したという。³⁹⁾ 馬氏は 7 人キョウダイの末子である。姉が 3 人、兄が 3 人である。馬氏一家は、少なくとも祖父の代から雲南とビルマの国境交易に従事していた。馬氏の世代になると、ビルマからタイまで一家の交易活動は広がっていた。

たとえば、馬氏の 2 番目の兄は、すでに 1934 年頃から、雲南を出発しビルマを経て、タイのチェンマイまで交易に出かけていた。馬氏は当時まだ幼かったが、村で兄を含めた年長者の交易人たちから、交易にまつわる武勇談や苦労話をよく聞いていたという。

馬氏が最初に交易活動をはじめたのは 15, 16 歳の頃だった。⁴⁰⁾ 馬氏が交易でよくでかけた場所は、ビルマだった。特にビルマ北部シャン州にあるパンロン (Panglong) には何度となくでかけていった。パンロンは、19 世紀末、大理出身のムスリムでかつ軍人であった杜文秀が清朝との戦いに敗れ、その亡命兵士がビルマに流れ着いて開拓した村として知られている。以来、この地は雲南系ムスリムの生活拠点となり繁栄した。馬氏からの聞き取りによると、パンロンはビルマのなかでも、アヘンを産する有数の交易地であり、雲南や隣接諸国ならびにビルマに住む各地の商人が集まっていた。

馬氏は、11 月頃に雲南からビルマのパンロンに向けて出発し、清明節⁴¹⁾ をすぎしてから再び帰郷した。⁴²⁾ 馬氏はパンロンで約 2 ヶ月間過ごした。商売には、「大生意」（大きな商売）と「小生意」（小さな商売）があった。雲南から運んだ品物には、手織り木綿（土布）、シルク（絲線）、⁴³⁾ 鉄鍋、銅鍋、錫鍋、歯ブラシなどの日常品など何でも運んでいった。また、商売上の目的のみならず、パンロンへの挨拶も兼ねて礼品も運んでいった。

パンロンでは、その地のワ族の住む山で 5 日に 1 度市場が開かれていた。馬氏たちは、そこで売られている商品を買って中国にもって帰った。市場では、米、鶏、パパイヤなど何でも売られていた。しかし、これらはすべて「小生意」（小さな商売）にすぎなかった。当時、パンロンにおいて最も重要だったのは、「大生意」（大きな商売）であるアヘンだった。馬氏によると、こうしたパンロンと雲南の国境貿易は、すでに祖父の代からはじまっていたという。

38) 馬氏へのインタビューは 1998 年から 2000 年までの間に行なわれた。

39) 家譜はチェンマイの手元にはなく、筆者は確認できなかった。

40) この頃に交易を開始した理由について、馬氏は「雲南の山は上りと下りがはげしく、それ以前の年齢では、脚がついていけないから」だという。

41) 冬至から数えて 105 日目から 3 日間で、新暦の 4 月 4 日から 6 日あたりを指す。

42) 清明節あたりになると蚊に悩まされ、馬やラバが蚊に刺されて死ぬことが多かったという。

43) このうち、シルクは、パンロン人が布を織り、それをワ族やタイ族に売っていた。

さて、馬氏は、ビルマで交易をしていたばかりではなく、さらにタイに南下した経験をもつ。まず1944年頃には、ビルマ・タイ国境付近のターキーレックに交易にいった。その後、1946年頃、今度は雲南から、先に述べたパンロンを経て、さらにチェンマイにも南下した。この時、雲南から2番目の兄と3番目のオジ（三叔）と一緒に出かけた。雲南、ビルマ、北タイにおける交易活動はつぎのようであった。

雲南から運んだ商品は、米、布、紙巻きタバコ（香烟）、靴、鍋類だった。これらの商品を經由地であるパンロンでまず売りさばく。パンロンに到着するのは旧暦で数えて2月頃だった。パンロンにつくと、アヘンを購入するためにしばらく滞在した。アヘンは通常、旧暦3月に収穫されるが、交易人は事前にパンロンに到着する必要があった。その後、このアヘンをチェンマイまで運んだ。チェンマイには当時、アヘン窟がたくさんあり、おもに華人系の潮州人によって経営されていたという。

一方、チェンマイに到着すると、フランス製の綿布、ドイツ製の染織物（靛精）などの外国の物資を購入した。当時、タイにおいて外国の商品はバンコクから入荷され、それらがチェンマイにある外国商社の支店で売られていた。交易人たちはそこから物資を調達するのが通例であった。

このほかにもさまざまな商売があったが、特に馬氏が印象的に語ってくれたのは馬だった。馬市場はチェンマイの南方面⁴⁴⁾で開かれていた。馬氏は黒色の馬を1頭買った。2番目の兄と叔父も1頭買った。3人はそれを雲南にもち帰った。大理には当時、牛、馬、水牛の家畜市にくわえて、競馬が開催されていた。3人がそれぞれの馬を大会に出場させたところ、叔父の馬が1位になった。とても嬉しかったと馬氏は懐かしく語ってくれた。

5.1.2 ビルマでの結婚と避難生活 — ビルマ、ラオス、そしてタイへ

1946年、馬氏は、頻繁にビルマのパンロンを交易で訪れるうちに、その地に住むパンロンの領主の孫娘と恋に落ち、結婚した。すでに述べたようにパンロンは、もともと雲南出身のムスリムが開拓した村であった。この点において、馬氏と妻とは、同じ雲南系ムスリムという意味では共通点があったが、結婚に際しては、妻の祖父から強い反対を受けた。というのも、パンロンのムスリムは、19世紀末にビルマに定着して以来、ビルマでの土着化が進み、雲南生まれのムスリムとは異なったサブ・グループとして、ビルマのなかで意識するようになっていたからである。彼らは、通常、雲南にすむムスリムとは区別して自分たちのことを「パンロン人」と呼ぶことが多い。これに対して、パンロン人以外の人たちは、おなじ雲南系であれ、「外頭人」（よそもの）と呼んでいる。

結婚後、馬氏夫婦はパンロンからビルマのタンヤンへ移り住んだ。その後、1968年までそ

44) 馬氏はなまりのある中国語でロンフー（long hu）と呼んでいた。なまりがあまりにもきついので、場所はまったくわからない。

の地で生活を続ける。パンロンを離れた主たる理由は、パンロンは、1940 年代にビルマを北上してきた日本軍の侵略にあい、それ以後村むらは壊滅状態になっていたからである。パンロンにおける生活は不安定であったため、馬氏夫婦はタンヤンへ移住した。

タンヤンでの商売の内容について馬氏はいっさい語ってくれなかったが、商売でトラブルがあり、やむなくラオスのヴィエンチャン（Viangchan）に移住することになった。馬氏夫婦は、1968 年から 1975 年までラオスに滞在した。ヴィエンチャンには、共産党を逃れてきた雲南の南部出身の漢人コミュニティがあった。⁴⁵⁾しかし、馬氏のような雲南系ムスリムはわずか 2 軒だけだった。⁴⁶⁾そこに住むムスリムたちは、パキスタン系ムスリムが中心で、彼らは牛肉や布を売って生活していた。馬氏夫婦は、身に付けていた中国医学の知識を活用して、漢方薬業を開業した。馬氏が触診と処方を行ない、馬氏の妻が処方箋にもとづいて中薬を煮出して患者に渡していた。ただし、ヴィエンチャンでの生活をめぐる語りは非常に断片的で、馬氏はこれ以上詳しく当時のラオスにおける生活については語ってくれなかった。

その後 1975、76 年にタイのチェンマイに再移住してきた。どうしてこの時期に馬氏夫婦がタイへ移住したのか、その理由はわからない。それ以後、チェンマイに住み続けている。チェンマイではやはりラオスで開業した漢方薬業を営んでいた。しかし、2001 年に馬氏が亡くなったため、廃業し、2008 年現在は妻が 1 人で暮らしている。

5.2 鄭氏の場合（雲南省箇旧県沙甸出身）— 中国とビルマの政変を経験して

5.2.1 生まれた背景

鄭氏⁴⁷⁾は 60 代（2000 年現在）の男性で、箇旧県沙甸鎮のムスリム集落に生まれた。鄭氏は 1952、53 年に雲南を出国した。実家はもともと「地主」⁴⁸⁾だったという。サトウキビ畑とトウモロコシ畑などをもっていた。生活は順調にいていたが、1949 年毛沢東政権に代わってから、生活は一変した。「地主」の鄭氏一家は、政変以後、当局の弾圧の対象になり懲罰を受けた。母は、共産党員たちによって、膝の後ろに石を入れられ、正座させられた。父は身体を縛られて叩かれた。家の財産は没収され、鄭氏たちにその後与えられたのは区画された小さな土地だけだった。鄭氏はこうした状況をみて将来に不安と恐れをいだき、雲南を出国することに決めた。

45) そこには、たとえば、雲南の文山、墨江、箇旧、思茅出身者やハニ族もいた。

46) 馬氏がラオスに移住した当初、ヴィエンチャンにはモスクはなかったが、ムスリムでお金を出し合ってモスクを建てた。しかし、モスクには名前がないという。

47) 鄭氏へのインタビューは、2000 年に鄭氏を含むチェンマイ市バーン・ホー・モスクの教区員たちと雲南に帰国した際に、同席したバスのなかで行なわれた。

48) 中華人民共和国成立以後に行なわれた土地改革で、農民は土地所有面積にもとづいて、地主、富農、中農、貧農、雇農として階級区分された〔石田 1996〕。鄭氏は「地主」と自称しているが、厳密に中国の階級区分に沿っているかどうか不明確であるので、ここでは「」付けとした。

5.2.2 雲南からの脱出とビルマからタイへ

雲南からの出国は、数人の小単位で逃げる人もいたし、十数人の集団になって逃げる人たちもいた。鄭さんは、両親とキョウダイを残して、家族のなかでたった1人出国した。鄭氏が15歳頃のことだった。鄭氏は沙甸から建水、玉溪を経由してビルマへの窓口となる西双版纳に向かった。着のみ着のままで歩き続け、約1ヵ月半の時間を要した。幸い、鄭氏は泳ぎが上手で、いくつかの河を泳ぎ渡り、命からがら逃れることができたが、泳げない人たちは河の流れに巻き込まれて死んでいった。途中、西双版纳では現地のイ族の食糧を盗んだりして、空腹をしのいだ。

雲南からは多くの避難民がそうであったように、打洛を経て、ビルマのセントウンに入った。セントウンでは、すでに知人が商売をやっていたからである。それと同時に、セントウンにはすでに雲南系ムスリム商人が建てたモスクがあったことも心の支えであった。鄭氏はその老板にお世話になり、セントウンとヤンゴン（Yangon）を飛行機で往来しながら商売に従事した。しかし、どのような商売をやっていたのかは、鄭氏は語ってくれなかった。ただ、ヤンゴンでは山には住まず、町のなかで生活したということだけを教えてくれた。そこには中国人のほか、インド人なども暮らしていた。鄭氏はヤンゴンで老板と一緒に約1年間住み、セントウンでは十数年間住み続けた。ビルマでの生活は安定していたという。

しかし、1960年代に入り、ビルマで政変が起こった。ネーウウィン政権主導による社会主義化と華僑への弾圧によって、ビルマの経済は麻痺してしまった。その結果、鄭氏がもっていたビルマ紙幣はすべて価値がないのも同然になり、「苦勞して貯めたお金はこの時ほとんどなくなってしまった」という。これ以上、ビルマでは生活できないと判断した鄭氏は、タイへ再移住することを決心した。

タイへはセントウンからターキーレックを通過してきた。鄭氏は、すでにセントウンで一度雲南人と結婚したが、死別していたので、ターキーレックで再婚するが、後に離婚する。そこで、タイでチェンマイの山地に住むカレン族の女性と3度目の結婚をする。鄭氏のタイにおける生活は明らかではない。しかしながら、ほかの多くの雲南系ムスリムと同じように、山地民を相手にした交易活動に従事していたことは間違いないだろう。タイで出会った3番目の妻は、おそらく山地における交易活動の過程で知り合ったと思われる。また、鄭氏の妻の姉も雲南人と結婚し、チェンマイ市に定住した。しかし、鄭氏は、今はもはや交易活動は行っていない。鄭氏は、これまでの貯蓄にくわえて、チェンマイ市内の朝市でプラトンコーと呼ばれる揚げ物と豆乳を売りながら生計を維持している。

5.3 明氏の場合（雲南省騰冲県出身）― 中国・ビルマにおける政変を経てタイへ

5.3.1 家族背景

明氏⁴⁹⁾は1950年、騰冲県のムスリム集落馬家寨村で生まれた。この時期はちょうど共産党による地主・資産家階級への弾圧がはじまった頃であった。幼い頃にすでに明氏の父は病死していたので、幼い明氏は、異母兄弟のなかで育てられた。しかし明氏のキョウダイたちは、革命後の中国において厳しく罰せられた。まず、長兄は政変後にまもなく中国当局に捕まえられ、死亡した。2番目の兄も捕まえられたが、辛うじて生き延びることができた。3番目の兄は、当局による弾圧が激しかった頃、昆明の雲南大学で勉強中であり、幸い逮捕を逃れることができた。

5.3.2 移住と交易活動

母は明氏の将来を案じ、1960年、明氏が10歳の時に故郷を出るよう強く勧めた。母はその後、政府当局に捕まった。そこで、明氏は母の妹と一緒に雲南から脱出した。当時はすでに国境は閉ざされていたが、明氏は村を出て、親戚が住んでいたビルマのタンヤンに向かった。タンヤンでの暮らしが落ち着くと、母も中国から呼びよせて、一緒に家族で生活を送ることになった。

その後、明氏は15歳の頃、馬やラバを使った交易活動を開始する。中国では経験したことがなかったが、ビルマでは、当地で産する宝石や翡翠を運んだり、布や衣服などの日常品も売買した。特に、ビルマでは、タンヤンとタイ・ビルマ国境のターキーレック間で交易を行ない、商売は順調に進んでいた。

しかし、1962年にネーウィンによるクーデターが起こってから、タンヤンとターキーレック間の交易は難しくなった。そこで、明氏は1978年から、商売ルートをタウンジー (Taunggyi) とタイのメーホンソーン間のルートに切り替えた。その頃から、タイとビルマを商売のために往来する生活がはじまった。おそらく、この前後に、タイにすむ雲南系ムスリムとの商売上のネットワークをつくりあげたのであろう。

明氏は1976年にタイに本格的に移住し、居を構え、生活をはじめることになった。タイでは、1950年代初頭にタイに定着していた雲南系ムスリムの一族の娘と結婚した。しかし、その妻は亡くなり、別の雲南系ムスリム女性と再婚した。現在、明氏はもう交易は行なっていない。交易で蓄積した資本を元に、チェンマイ市と雲南の昆明に2つのオフィスを構えた貿易会社を経営している。

49) 明氏へのインタビューは2000年、チェンマイ市にて行なわれた。

6. 雲南系ムスリムの交易と越境経験の変容をめぐる考察

以上、20 世紀前半までと 20 世紀半ば以後という 2 つの時期に分けて、個人の口承史で得られたインタビュー資料をもとに、北タイにおける雲南系ムスリムの交易をめぐる越境経験とその変容のプロセスを跡づけた。従来、雲南系ムスリムは交易商人という一枚岩的なイメージで語られてきたが、異なる時代状況ごとに彼らの交易活動の内実と移動経験は当然にも異なる。

本論では、特にこれまでの研究で詳細に検討されていなかった、20 世紀後半における中国、ビルマやタイといった複数の国にまたがる国際的な政治的、経済的変動や戦争によって、雲南系ムスリムのタイへの移住と定着化がどのように多様化し、交易が変容したのかについて記述した。

その際、明らかになったのは、20 世紀後半における移住は、それ以前の 20 世紀前半期のように交易地の延長上に行なわれたのではなく、それゆえ、彼らの定着地が交易地に限られなかったことである。タイービルマ国境の山岳地域に 1950 年代から 1960 年代初頭に形成された難民村はその典型である。それらの村むらはビルマからの戦乱的な移住によって生み出されたり、場合によっては国民党軍集落として管理されているケースもみられた。

集落の形成パターンの変化にくわえて、交易活動の内実はずいぶん大きく変化してきた。すなわち、19 世紀半ばから 20 世紀前半までの交易者たちは、中緬泰国境をまたにかけて、地域の特産品を含むさまざまな商品を運搬していた。また、複数の口承史から、当時の雲南系ムスリムの交易ルートは、雲南ービルマタイと雲南ーラオスタイといったように、雲南の地理的特性を生かして展開されていた。しかしながら、20 世紀後半では、中国、ビルマ、タイの政治的、軍事的、経済的事情は大きく変化し、この時期の雲南系ムスリムは移動過程で中国の内戦、国民党軍との接触やビルマ軍の攻撃を経験した。また、タイにおいては、個人の口承史が示すように、彼らの定着過程は決して安定したものではなく、避難民的要素が色濃かった。したがって、この時期における交易は、あくまでも戦乱と避難民的生活のなかで生き延びるための生計手段にすぎず、交易品としてはアヘンに依存することが多かった。場合によっては、ビルマで銃や弾薬を運搬するケースもみられた。こうして、雲南系ムスリムをめぐる交易活動は、20 世紀後半以後、戦乱や避難民という特殊な歴史的状況のなかでしだいに限定化されていった。

また、口承史の収集過程でしだいに明らかになってきたのは、こうした移動をめぐる歴史的変化が、交易活動の内実のみならず、交易活動という行為自体についての当事者たちの見方にも変化を及ぼしている点である。19 世紀半ばから 20 世紀前半までの先駆者をめぐる交易活動は、多大な財を成しえた成功者の武勇伝としていまなお、彼らの社会で語りつがれている。チェンマイ市では、本論の事例でとりあげた納パーサンや鄭崇林氏があてはまる。これに対して、20 世紀後半におけるビルマやタイでの交易活動について、詳細に筆者に語ってくれる人

はほとんどいなかった。その背景には、20 世紀後半以後から現在にかけて、雲南系ムスリムが主たる生計手段としたアヘン交易が国際社会のなかで厳しい取り締まりの対象となり、違法とされてきたことが関係していると思われる。たとえばタイでは、1950 年代末以後、山地民が栽培するアヘンの材料となるケシの栽培やその流通は違法行為となった。このような、タイならびに国際社会からのアヘンに対する負の眼差しは、いまなおタイで生きる雲南系ムスリムの歴史的経験に否定的な意味を付与し、それが当事者の認識や語りにも深く影響していると考えられる。

ただし、本論でも述べたように 20 世紀後半の越境は、1960 年代半ば以後から近年までにかけて個人レベルで多様化し、交易活動の対象となる商品は必ずしもアヘンに限定されるわけではなくなってきた。本論では詳しくとりあげなかったが、タイへの定着化が進むなか、事例 5.3 の明氏の事例にみるように、現在では交易活動に従事している人は減少し、経済活動は貿易業、旅行業、飲食業、建設業から公務員に至るまで幅広く、多岐に変化している。世代交代が進むにつれて生じている生業形態の変化は、雲南系ムスリムを交易人として一様にとらえる外部者の見方を大きく修正させるものである。

今後は、雲南系ムスリムの歴史的経験の多様性に着目しながら、かつての交易がどのようなあらたな経済活動に展開し、彼らの生活や社会、さらに自己認識に影響をもたらしているのかについて、移民一世と二世における世代間の違いからみた雲南系ムスリム社会の変化の諸相とその変容を描き出していく必要がある。

引用文献

- Chang Wen-Chin. 1999. Beyond the Military: The Complex Migration and Resettlement of the KMT Yunnanese Chinese in Northern Thailand. Ph.D. Thesis, Katholieke Universiteit Leuven.
- Chiranan, Prasertkul. 1989. *Yunnan Trade in the Nineteenth Century: Southwest China's Cross-Boundaries Functional System*. Asian Studies Monograph No. 044, Institute of Asian Studies. Bangkok: Chulalongkorn University.
- Forbes, Andrew D. W. 1986. The "Panthay" [Yunnanese Chinese] Muslims of Burma, *Journal of Institute of Muslim Minority Affairs* 7(2): 384-394.
- . 1987. The 'Cin-Ho' (Yunnanese Chinese) Caravan Trade with North Thailand during the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries, *Journal of Asian History* 21(1): 1-47.
- . 1988. History of Panglong, 1875-1900: A "Panthay" (Chinese Muslim) Settlement in the Burmese Wa States, *The Muslim World* Vol. LXXVIII (1): 38-50.
- Forbes, Andrew and David Henley. 1997. *The Haw: Traders of the Golden Triangle*. Chiang Mai: Teak House.
- 高 発元編. 2001. 『雲南民族村寨調査一回族 通海納古鎮』昆明：雲南大学出版社.
- Hill, Ann Maxwell. 1998. *Merchants and Migrants: Ethnicity and Trade among Yunnanese Chinese in Southeast Asia*. (Monograph 47). New Haven: Yale Southeast Asia Studies.
- 石田 浩. 1996. 「社会主義改造と伝統農村の復活」『中国伝統農村の変革と工業化—上海近郊農村調査報

- 告』晃洋書房, 45-81.
- 胡 陽全. 1999. 『雲南馬幫』福州：福建人民出版社.
- 黄 紅軍. 1993. 『車馬 溜索滑竿』成都：四川人民出版社.
- Imanaga, Seiji. 1990. *The Research of the Chinese Muslim Society in Northern Thailand*. Hiroshima: Hiroshima University in association with Keisui-sha.
- 栗原 悟. 1991. 「清末民國期の雲南における交易圏と輸送網 — 馬幫のはたした役割について」『東洋史研究』50(1): 126-149.
- Lin Chang-Kuan. 1991. The Etymological History of Panthay: Chinese Yunnanese Muslims, *Journal Institute of Muslim Minority Affairs* 12(2): 346-394.
- MBH (Matsajit Ban Ho). 1996. *Nangsu Sucibat Nuang nai Ngan 50 bi Tha Khrong Thai Chiang Mai 700 bi 80 bi Matsajit Islam Ban Ho Ho So 1417*. Chiang Mai. (『回歴 1417 年チェンマイ 700 周年・バーン・ホー・モスク 80 周年記念プログラム』).
- 馬 維良. 1996. 「雲南回族馬幫的對外貿易」『回族研究』21: 18-26.
- 中田吉信. 1971. 『回回民族の諸問題』アジア経済研究所.
- . 1992. 「中国における回族問題」『就実論叢』22(2): 131-159.
- 王 柳蘭. 2004. 「国境を越える『雲南人』—北タイにおける移動と定着にみられる集団の生成過程」『アジア・アフリカ言語文化研究』67: 211-262.
- . 2006a. 「『難民』から『華』人への道—戦乱と越境に生きる北タイ雲南人の民族誌」京都大学大学院人間・環境学研究科博士学位申請論文.
- . 2006b. 「北タイにおけるイスラーム環境の生成過程—雲南系ムスリムの事例から」『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容—制度・境域・実践』林行夫編, 平成 15~17 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A) 研究成果報告書 (研究代表林行夫), 801-845.
- . 2007. 「移動をめぐる歴史的経験の重層性—タイ・ビルマ国境の雲南系漢族・雲南系回族の事例から」『社会人類学年報』33: 171-183.
- . 2008a. 「『難民』を通じて移動を考える—北タイ雲南系華人の事例から」李仁子・金谷美和・佐藤知久編『はじまりとしてのフィールドワーカー自分がひらく, 世界がかわる』昭和堂, 119-135.
- . 2008b. 「北タイにおける雲南人『難民』定着初期過程における生存戦略—国籍取得と台湾とのネットワーク構築をめぐる」『年報 タイ研究』8: 51-70.
- SMC (Samakhom Muslim Chiang Mai). n.d. *Nangsu Chaek nai Ngan Anuson Ruam Jai su Samakhom Muslim Chiang Mai 35 bi*. Chiang Mai. (『チェンマイ・イスラーム協会 35 周年記念本』).
- Suthep, Soonthornpasuch. 1977. *Islamic Identity in Chiangmai City: A Historical and Structural Comparison of Two Communities*. Ph.D. Thesis, University of California, Berkeley.
- Wang Liulan. 2006. Hui Yunnanese Migratory History in Relation to the Han Yunnanese and Ethnic Resurgence in Northern Thailand, *Southeast Asian Studies* 44(3): 337-358.
- Yegar, Moshe. 1966. The Panthay (Chinese Muslims) of Burma and Yunnan, *Journal of Southeast Asian History* 7(1): 73-85.
- 吉松久美子. 2003. 「ミャンマーにおける回族 (パンデー) の交易路と移住—一九世紀後半から二〇世紀前半を中心に」『イスラーム世界』61: 1-25.

地図

- Nelles Maps: Southeast Asia (1:4,000,000), 出版日記載なし.
- Nelles Maps: Myanmar (Burma) revised by Asia Books, 出版日記載なし.
- 高橋彰編. 1994. 『平凡エリアアトラス—地図で知る東南・南アジア』平凡社.